

[翻訳]

P. B. シェリー 詩選 (1)

P.B.シェリー 作  
加藤 芳子 訳

「エウガネイ丘陵にて」

多数の緑の 島々が  
浮ぶは悲嘆の深く 広い海に違いない。  
さもなくば 疲れやつれた水夫が  
漂流するはずもない。  
昼も夜も 夜も昼も 5  
その航跡の周囲を 閉じてしまう  
真っ暗闇の中でなど。  
頭上では 太陽が沈んだ夜空が  
雲に満ち 重々しく迫っている。 10  
背後からは 嵐の艦隊が  
急いでくる。稲光の足と  
裂けていく帆、ロープ、厚板と共に。  
やがて船は こぼれる深淵の海から  
死を 飲みそうになり 15  
眠りのように深く 沈んでいく。  
眠っている人が 永遠の中を  
転げまわるように 見える時のように。  
そして暗く遥かな 海岸の前に広がる  
ほの暗く 低い水平線は 20  
まだ遠のいていく。心は乱れていても

まだ [助かろうと] 憧れている  
 しかしもう 探すにも遠ざけるにも力なく  
 水夫はどンドン 流されていく。  
 休むことなき 波の上を 2 5  
 墓という 安息所へと。

迎えてくれる友がいなくとも それが何だ。  
 人の心が 愛のせつかちな鼓動を打ち  
 彼の心に会わなくても それが何だ。  
 どこだろうと さまようがいい。 3 0

彼はあの最後の日の前に 夢見れるのか？  
 苦悩からの避難所を 友情の微笑や  
 恋人の愛撫に 見つける事を？

それならそんな事が 存在しようがしまいが  
 彼に悲嘆をもたらす事など 殆どないだろう。 3 5  
 その胸はもう無感覚で 冷たく  
 後悔しながら 恋人は腕を絡ませるだろう。  
 血管には血も流れず 凍りついている。

かつては 苦痛の脈が満たしたのに。  
 苦痛に歪んだ唇や 額の周りでは  
 辛辣な言葉から それてきた 4 0  
 生きてた 神経の一本一本も  
 今や十二月の木の枝で 樹液のない  
 木の葉のように 凍ってぶら下っている。

嵐が永遠に 打ち寄せ揺るがす  
 北国の 海の岸辺で 4 5  
 この衰れな男は まるでかつて眠っていたように  
 ポツンと一塊となって 横たわり  
 白い頭蓋骨一つと ひからびた骨七本と化し

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

石の縁には イグサが数本生えるのみ。  
海と陸の 境界となっていた。 5 0  
嵐の大波の 上を飛ぶ  
カモメ以外 悲しみの声は  
何一つ 聞こえない。 5 5  
まるで 国王が勝ち誇り  
身内殺しの虚飾の中を 馬で進む  
殺戮された 町のように  
吠えまくる 嵐以外は。  
埋葬されてない 人骨の周りでは 6 0  
悲しい音が 沢山聞こえる。  
陽の差さない 蒸気のように暗い  
彼のために 哀歌など聞こえない。  
彼はかつては 生命と思想に身を包んでいたが  
今の彼は動きも 悲しみもしない。 6 5  
そう 広い苦悶の海にも  
花咲く島は 沢山ある。  
そんな島へと 今朝  
私の帆船は 微風に導かれて来た。  
エウガネイ丘陵の 中に立ち 7 0  
私は勝利の歌に 耳を傾けた。  
その歌で 隊を組んだミヤマガラスが  
荘厳な日の出に 挨拶をしていった。  
霜に覆われた翼して 集まってきて  
湿った霧の中を 灰色の影のように舞い上がる。 7 5  
やがてまるで 東の空が張り裂け  
次に 夕暮れの雲のように  
炎の色と青で まだらになり  
底知れぬ高い空に 浮ぶように

- 彼らの 紫色の羽根は 8 0  
 金色の雨粒を 散りばめて  
 朝日に光る森の上を きらめき渡る。  
 まるで彼らは 静かに群れをなし  
 朝の気まぐれな 微風にのり  
 霧の裂け目を通して 航海していくよう。 8 5  
 そして裂かれてきらりと 光る雲は  
 暗い絶壁にそって 流れるように下りていき  
 やがてこの寂しい 丘の辺りは  
 一面に明るく澄んで 静かになる。
- 眼下は 緑の海のように 9 0  
 ロンバルディアの 波なき平原が広がる  
 蒸気が多い 空気に囲まれ  
 美しい町々が 島のように浮んでいる。  
 昼の青い 目の下には  
 大洋の秘蔵っ子 ヴェネツィアが横たわっている。 9 5  
 そこは人の住む 城壁の迷路  
 アムピトリーテー [ポセイドンの妻、海の女王 トリトンの母] の 運命の邸宅  
 そこを彼女の 白髪之父は今や  
 その青く光る波で 舗装している。  
 見よ！太陽が 背後から昇ってくる。 1 0 0  
 広々と 赤く輝き 水晶のように  
 澄んだ海水の 震える  
 水平線の上に 半ばもたれかかって。  
 そして煌々と輝く かまどの中のように  
 あの光の深い 割れ目の前では 1 0 5  
 柱や塔、ドーム、尖塔が  
 炎のオペリスク のように輝き

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

- 気紛れに 揺らめいて  
暗い大洋の 祭壇から  
サファイア色の 空へと向いている。 1 1 0  
まるで 生贄の炎が  
大理石の祭壇から 立ち上り  
アポロが 昔の事を語った  
黄金のドームを 刺し貫くように。
- 太陽に囲まれた 都市よ！汝は 1 1 5  
大洋の子供であったが 次に彼の女王となり  
今はもっと 暗い時代がやって来て  
汝はやがて その餌食となるに違いない。  
もし汝をここで 高揚させた権力が  
汝の水の棺を そのように神聖なものとするのなら。 1 2 0  
それなら汝は 征服という汚名を額につけ  
今ほど わびしくない廃墟として  
波間に浮ぶ汝の玉座から 奴隷の奴隷へと  
身を落として しまうだろう。  
その時カモメは 人の滅った 汝の島々の上を 1 2 5  
昔と変わらず 飛ぶだろう。  
全ては いにしえと同じ。ただ  
沢山の 宮殿の門には  
緑の海草の 花がはびこり  
潮がむっつりと 代わるにつれて 1 3 0  
大洋自身の 岩のように  
捨てられた 海の上に  
倒れるのを 除けば。  
夕暮れ時に 迷いながら  
海を進んでいく 漁夫は 1 3 5

帆を広げ オールを取ると  
 暗い海岸を 通り過ぎて行く。  
 急に眠りからさめて 星が燦然と輝く  
 海の上で 汝の死が  
 素早い死の 仮面を 1 4 0  
 その航路の上に 広げる事を除けば。

私が今ここで 見ているように  
 塔が金色の空気の中で 震えているのを  
 見つめるだけの 人々は  
 想像だにしないだろう。それらが 1 4 5

人の形をしたものが 汚染に育てられた氏虫のように  
 偉大な人の 死体にまわりつき  
 殺されて今や 朽ち果てていく 墓だとは。  
 しかしもし「自由」が 己れの全能に 1 5 0  
 目覚め ケルトの暴君の監獄から  
 冷たい地下牢の 全ての鍵を  
 振り 落とすなら

そこでは多数の都市が 不名誉な事に  
 汝のように 鎖に繋がれており 1 5 5  
 汝と汝の姉妹の間は 全て  
 いにしへの思い出に もっと崇高な  
 新しい美德を 絡ませて

この明るい土地を 飾るかもしれない。  
 もしそうでないなら 真実の日の出を 1 6 0  
 汚す雲など 汝も彼らも  
 彼女の太陽に消滅され 消えてしまうがいい。  
 大地が彼らを 容赦してやれるから。  
 草花のように 年月がたてば

汝のチリから 新しい国々が生まれ  
もっと優しい花を 咲かせるだろうから。 165

滅びてしまえ！汝の炉床のない海の上を  
漂う事が できればいい。  
まるで 汝の空の衣を  
この世が 永遠にまとうように。 170

汝のやつれた顔を 隠す事のできない  
「時」のぼろぼろの 棺より  
もっと崇高な 一つの思い出だけは。  
アルピオンの 歌の  
嵐をついて進む 白鳥は 175

悪夢の 力により  
その先祖の流れから 追われて  
汝の中に巣を見つけた。そして大洋は  
彼を 大歓迎したので

その喜びは 彼の喜びとなり 180  
彼の唇からは 音楽のように  
恐怖を抑える 力強い  
雷鳴の上に 轟いた。

アルピオンを永遠に 流れる  
音楽的な波で 詩歌の尽きる事のない流れが 185  
多くの詩人の墓に 打ちつけて  
最後の秘蔵っ子が 逃げてしまった

と嘆くとて どうでもよい！  
汝が全ての 死者によって  
汝自身の 名誉に対して 190  
何も報いる事ができないとしても どうでもいい。

——おお むしろ 汝の罪や悪しき奴隷制度が

- 太陽のような魂を暗くするとしても どうでもよい！  
 ホメロスの霊が スカマンデル川〔トルコ北西部、今のメンデレス川〕の  
 破壊的な源のあたりに 執着するように 195  
 世界で一番神聖なる シェイクスピアの力が  
 神が人類の間に 存在すると考えた  
 全知の神の 力のように  
 エイヴォン川と世界を 光で満たすように。  
 ペトラルカの 骨壺からの愛が 200  
 かなたの山の墓の中で 消える事のない  
 ランプとして 今でも燃えているように。  
 その光により人の心は 天上的なものを見るのだ。  
 そのように汝は 力強い霊なのだ。  
 汝をかくまったあの都市 ヴェネツィアもそうであれ。 205
- 見よ 太陽が 思想の翼もつ「自由」のように  
 空に 昇っていく。  
 やがてその 普遍の光は  
 平野も宇宙も 一様に照らすように見える。  
 海から霧が 広がると 210  
 朝日は今や ヴェネツィアの塔の上に  
 昔の栄光のように 死んで横たわる。  
 その灰色の雲が 広がる下の方には  
 ドームがひしめく 誇り高いパドゥアの町が  
 人は住むが 実りで輝く平野の中に 215  
 ポツンと孤立している。そこでは  
 農夫が敵の 穀倉の中に  
 その穀物を 山と積み  
 真っ白な牛が ゆっくりと 220  
 紫色のブドウ酒を キーキーキしむ



大荷車の上に ずっしりと積んだ。  
残忍なケルト人も それをガブ飲みしたら  
野蛮な意思と共に 酔っ払って眠るかも知れない。  
そして剣に対して 小鎌は変わることなく  
対峙して横たわる。多くの領主は 2 2 5  
その影が毒である 雑草のように  
この地域の豊作の源に はびこってはいるが  
その束は実り 破壊の収穫物の  
搬入の時期と なっている。 2 3 0  
人は撒いた種の収穫を 刈りとらねばならぬ。  
力は常に力から 流出しなければ  
もっと悪くなる。しかし愛も理性も  
暴君の怒りを 奴隷の復讐へと  
変える事ができないなら もっと辛い悲しみだ。 2 3 5

パドゥアよ その城壁の中では  
汝の無言の客は 祭に来て  
「息子」も「母」も 「死」も「罪」も  
エゼーリンを巡って サイコロを振り  
やがて「死神」が叫ぶ 「勝った、勝った！」と 2 4 0  
そして「罪」は掛け金を失い 呪いをかけた。  
しかし「死神」は彼女の罪を 軽減すると約束した。  
それで彼女が「悪玉の皇帝」になるようにと  
彼女のために 嘆願する。運命の年月が過ぎ  
ポー川と東部アルプスの 雪の間の全域は 2 4 5  
強靱なオーストリア人の 支配下になった。  
「罪」はこの上なく ほくそ笑んだ。  
その時以来 そう ずっと昔から  
あの「死神」と「罪」という 近親相姦のカップルの

両者が海岸の 西から東までを支配した。 250

二人は太陽が ツバメを追うように

暴君を 追い求める。

「後悔」が 「罪」に従うように

そして「変化」が 「時」に従うように。 255

汝の大広間では パドゥアよ

学芸のランプは もはや燃えてはいない。

その激しい軌跡も 彗星のように

太陽の墓の上で消えている。 それは

裏切られ 裏切るために かすかに光っている。 260

かつては遠い 国の人々が

その聖なる [学芸] 炎を 崇めにやって来た。

その頃その光は この冷たく暗い

地上の多くの炉床に 火をつけた訳ではないが

今や 昔の光から 新しい炎が 265

広い世界の力の 下から燃え上がる。

しかし彼らの火花は 暴君に

踏みつけられて 汝の中では消えている。

丁度ノルウェイの 木こりが

マツ林の 小さな深い谷間で 270

藪の中の小さな 明るい炎を鎮圧するように。

その間果てしない森は ざわめき

その力強い 幹は

このように低い所で生れた 火により裂ける。

彼の足元の火花が 消えると 275

彼はその幹が 育んだ炎が

暗くなった空を 勝ち誇って

何万もの舌をして 遠吠えし

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

恐怖におののき消えていくのを 見て驚く。

そのように おお暴君よ 汝は 280  
周囲の光を見ているのだ。そして  
音を立てて炎が燃えあがるのを聞き 恐れるのだ。  
地上に這いつくばれ。 そうだ  
汝の紫色の傲慢を チリの中に隠せ!

今やあたりは 正午になった。

今は秋の輝く 真昼時だ。 285  
柔らかい 紫色の霧が  
アメジスト色の 蒸気や  
空気に溶けた星 のように  
光と香気を 混ぜて 290

曲線を描く 水平線のはるか彼方から  
天の高所 にまで  
溢れている空と

足元に静かに 横たわる平野を  
満たしている。 生れたての霜が 295  
朝一番の翼をつけたばかりの 足で歩いた

まだ水の滴ってない 木の葉は  
その明るい跡が まだ光っていて  
格子模様の もじゃもじゃの  
周りが暗くなった 荒野を貫いている 300

赤や金色の ツタも  
この古めかしい 塔から  
風のない空気を 指差している。

薄暗く尖った草は 言うに及ばず  
南に島のように ポツンと浮ぶ 305  
オリーブの木が麓に生える アペニン山脈の緑も。

- そして雲と太陽の間 空高い所に  
 広がる アルブル山脈も。  
 そして生きとし生けるもの 一つ一つに 3 1 0  
 そしてかくも 長い間  
 この歌の素早い流れを 暗くして  
 空の栄光によって 互いに浸透し合って  
 横たわっている私の魂も。  
 それが愛だろうと光 ハーモニーだろうと 3 1 5  
 露のように 天から降りてくる  
 香りや万物の 靈であろうと  
 孤独な 宇宙に住み  
 この詩を育んでいる 私の魂をも満たしている。  
 昼が下りてくる。そして昼の後には 3 2 0  
 秋の夕べが すぐにやってくる。  
 新月と 星一つを連れて  
 星は月に 仕えているよう。  
 月は日没の 輝く泉から  
 半ば紅の光と そして 3 2 5  
 あの 朝の優しい夢は  
 (まるで 翼つけた風が  
 この孤独な存在の 弱々しい小舟として  
 苦悩の記憶の 中に浮ぶ  
 あの静かな島に もたらしたもの) 3 3 0  
 よその苦しむ者へと 自由に飛び去り  
 そしてその昔からの 舵手たる苦痛は  
 再び その舵のそばにすわる。
- 他の繁栄している 島々は 3 3 5  
 生命と苦悩の海に 浮んでいるに違いない。

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

- 他の人々の霊は、あの入り江の上に  
漂い 消えていく。恐らく今でさえ  
どこかの岩を 荒波が襲い  
翼を閉じてすわり 私の小舟を待っている。 3 4 0  
どこか穏やかで 花咲く入り江に  
舵をとり 導こうと。  
そこでは情熱も苦悩も 罪の意識もなく  
私と 私が愛する人々のために 風のない東屋が  
芝生の丘の谷間に建てられている。 3 4 5  
そこには荒々しい 海鳴りが満ち  
優しい日射しと 古い森の音が  
辺りに こだまし  
息づき輝く 全ての草花の 3 5 0  
聖なる光と 香りが満ちている。  
そんな所なら私達は とても幸せに生きれるだろう。  
空気の霊も 私達をねたみ  
私達の心を 癒す楽園に  
夥しい墮落が誘いさえするかもしれない。 3 5 5  
しかし彼らの怒りは あの神々しく静かな気候と  
その風の翼が この高揚した魂の上に  
芳香を雨と降らせる 風に征服され  
明るい海が うねる下へと  
去っていつてしまう。その間そよとの風もない合間は 3 6 0  
音楽的な ささやきの中で  
この靈感を受けた 魂に  
その深い メロディーと 3 6 5  
生命の息吹のように あの甘美な住まいの  
万物を それ自身の穏やかな友愛で  
取り囲む 全ての争いごとを

癒す 愛とを 与える。

それらはそれではなく 変わるものである。そして

370

やがて月下の人の あらゆる魂は

その空しいねたみを 後悔し

地球は再び 若返るであろう。

[1818年10月 「ロザリンドとヘレン」と一緒に出版さる]

### 「知的美に寄せる讃歌」

何か目に見えぬ力の 恐ろしい影が

目には見えずとも 私達の中に 漂っている。それは

花から花へと這うようにそよぐ 夏風のように

気まぐれな翼で この移ろいやすい世界を訪れる。

どこかのマツ林の山かげから降り注ぐ 月の光のように

5

それは 気まぐれな目をして

人の心や顔を 一人一人訪れる。

夕暮れの空の色や 音のハーモニーのように

星明かりに照らされて 空一杯に広がる雲のように

消えた音楽の 余韻のように

10

優美さゆえにいとしく その神秘性ゆえに

一層いとしい もののように。

人の思想と形持つ 全ての人を 美の精よ

汝自身の 色で清める

汝はどこに 行ってしまったのか?

15

なぜ汝は通り過ぎてしまい 私達の境遇を

空しくわびしい 涙に満ちた 暗く巨大な谷間にしてしまうのか?

なぜ太陽光線は かなたの山の川の上に

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

- 永久に虹を作る事ができないのか 聞いてみよ。  
なぜ一度は姿を見せたものが 弱ったり消えたりするのか 2 0  
なぜ恐怖や夢 死や誕生が  
この地球の日光に あのような陰影を投げかけるのか  
なぜ人は愛と憎しみ 落胆と希望に 見通しを持つのか？
- これに対する返事が どこかもっと崇高な世界から 2 5  
賢人や詩人に 与えられた事は かつてない。  
だから悪魔や幽霊や 天国という名前は  
彼らの空しい努力の記録として 残っているだけだ。  
不信 偶然 無常などという  
私達が見たり 聞いたりするもの 全てからは  
言葉に発せられた呪文が 分かれるのに役立つかもしれない。 3 0  
か弱い呪文よ。  
汝の光だけは 山の上に追いやられた霧のように  
あるいは何か静かに反響する 楽器 [コアレスティーナ] の弦を通して  
夜の風が運んでくる 音楽のように  
あるいは真夜中の流れに映る 月の光のように 3 5  
生命の落ち着かない夢に 恩寵と真実を与えてくれる。
- 愛や希望や自尊心は 不特定な瞬間に与えられると  
雲に似て 付いたり 離れたりする。  
人は不滅の生命を持ち 全能でもあった。  
汝は今と同様 人知れず 怖い存在であり 4 0  
汝の光栄ある群れにより  
人の心の中に 安定した状態を保った。  
汝、恋人の目の中で 満ち欠けする 同情の メッセージャー。  
汝は消えゆく炎にとっての 暗闇のように  
人の思想にとって 栄養である。 4 5

汝の影が来たからといって 行かないでくれ！  
墓が生命と恐怖のように 暗い現実となるといけないから  
行かないでくれ。

まだ子供の頃私は 幽霊を探して歩き  
しんとした多くの部屋や洞窟 廃墟や星明りの森の中で 5 0  
死者との高邁な話ができる希望を 恐る恐る追い求めた。  
若者がよく知っている 恐ろしい名前を呼んだ。  
が 私の声は 届かなかつたし  
彼らが見えた事も なかつた。  
そよ風が小鳥と花の知らせをもたらして 目覚めさせ 5 5  
生きとし生けるものに求愛している あの甘い季節に  
生命の運命について 深く瞑想している時  
突然 汝の影が 私の身に降りかかった。  
私は金切り声を上げると 恍惚となって両手を握りしめた！ 6 0

私は 汝と汝のものに対して 私の力を捧げる事を  
誓った。私は誓いを守ってきたは いないだろうか？  
胸をドキドキ 目をキラキラさせ 今でも私は  
声も聞こえぬ墓から 一万年分もの幽霊を 一つ一つ呼び出す。  
彼らは熱中 あるいは愛の喜びという 6 5  
想像上の東屋の中で 私と一緒に  
嫉妬深い夜を 見えなくなるまで 見守ってきた。  
彼らは 汝がこの世界を その暗い奴隷の状態から  
解放してくれるだろうという 希望とは離れて  
私の額を喜びが 照らした事がないのを知っている。 7 0  
おお 恐ろしい愛らしさよ これらの言葉が  
表現できない事は何でも 汝が与えてくれるとは。



昼が過ぎれば 太陽はもっと厳かで

穏やかになる。秋には ハーモニーが訪れ

そして秋の空には 輝きがある。

7 5

それは夏の間には 見聞きしなかったものだ。

まるで あるはずもなく 存在した事がなかったかのごとく!

かくて汝の力をして 私の受動的な青春の上に

降りてきた 自然の真理のように

私のこれからの人生に対して 静穏を与えて下さい。

8 0

汝と汝を内包する 形あるものを崇拜する者に

美しい霊よ 汝を汝の魔力は 自らを恐れるよう

そして全人類を愛するように 束縛したのだから。

[日付なし]

### 「ソネット」

#### 「オズィマンディアス [エジプトのラムセス2世]」

私は 古代の国から帰ってきた 旅人に会った。

彼が言うには 二本の巨大で胴体のない 脚部の石像が

砂漠の中に立っている。その近くには 砂に半ば埋もれて

ヒビ割れた頭部が 横たわっている。そのしかめ面と

シワだらけの唇 そして冷酷に命令するような冷笑は

5

彫刻家が 彼の感情をよく読んでいた事を 物語っている。

それは今でも これらの生命のない物体の上に刻まれて 生き残っている。

それらをあざ笑う手と それを育んだ心の上に。

そして その台座の上には 次の言葉が見えている。

「余の名はオズィマンディアス 王の中の王

1 0

汝ら力強き者よ 私の仕事を見て 絶望せよ!」

他には何も残っていない。巨大な残骸の周りには  
寂しく水平な砂漠が 無限に剥き出しのまま  
はるか彼方にまで 広がっているだけ。

[日付なし]

「感覚をもつ植物 [眠り草]」

第1部

感覚をもつ植物が 庭に育ってきた。  
若い風がそれを 銀の露で育てた。  
するとそれは光に向かって その扇状の葉を開き  
夜がキスすると それを閉じた。

やがて春が 美しい庭に蘇った。 5  
まるで「愛の霊」を至る所で感じたように。  
すると大地の暗い胸の上で 花やハーブは  
冬の休息の夢から 蘇った。

しかし庭にも野原にも 荒野にも  
恋人の甘い欲求にあった 真昼の雌鹿のように 1 0  
至福に喜び震え 喘ぐものはかつてなかった。  
相手のいない この感覚を持つ植物ほどは。

マツユキソウ 次にスマレが  
暖かい雨にぬれて 大地から蘇った。  
すると彼らの息は まるで人の声や楽器のように 1 5  
芝生から漂う 新鮮な香りと混じり

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

やがてまだらのアネモネと 背の高いチューリップと  
中で一番美しい ナルキッソスは  
小川の片隅に映る 己の眼に見入り  
やがて 自分の愛しい美しさ故に死んでしまう。 2 0

そしてナーイアス [ギ神話、水の精] のような ドイツスズランは  
青年が美しく 情熱を青ざめさせるので  
そのおびただしい 鈴なす花は  
優しい緑のパヴィリオンを 通して見える。

そして紫や白や青の ヒヤシンスは 2 5  
かくも繊細で柔らかに 情熱的な音楽の  
甘い鐘の音を その鐘状の花から新たに振りまく。  
それはまるで感覚の中の 香りのように感じられた。

そしてバラはまるで風呂に飾られた ニンプのように立ち上がり  
その燃えるような胸の深みの ヴェールを解き 3 0  
やがて彼女の美と愛の精髓は 花びらが重なって  
気が遠くなるような芳香に むき出しになっていた。

そして棒のようなユリは マイナス [ギ神話、ディオニソスの供の女] のように  
月光の色した 盃状の花を持ち上げ  
やがてユリの目たる 火のように赤い星のしるしは 3 5  
澄んだ露を通して 柔らかい色の空を見つめた。

淡い色のジャスミンと 甘いゲッカコウは  
世界で一番甘い香りを放つ。  
そして世界のあらゆる土地産の あらゆる希少な花が  
その庭では 完璧に咲き誇っていた。 4 0

そしてその気まぐれな胸が もてあそばれた小川の上では  
 こんもり覆っている 花の枝の下で  
 金色と緑の光で 沢山のもつれた色の空を通して  
 斜めになって

幅広いスイレンが 震えながら広々と横たわっていた。 4 5  
 そして星形の川のつぼみが そばでかすかに光った。  
 そしてその周りには、優しい小川が流れ踊っていた。  
 甘美な音と輝きを 放ち動きながら。

そして芝生とコケの 曲がりくねった道は  
 庭の中を縦横無尽に 走っていた。 5 0  
 ある道は太陽と微風に同時に開いていて  
 別の道は花咲く木々の 東屋の中で消えている。

全ての道は 伝説上のアスフォデル [ギ神話、極楽の不死の花、スイセン] 位美しい  
 デイジーや可憐なスズランの花が 敷き詰められ  
 昼がうな垂れると 一緒にうな垂れてしまう 小さな花は 5 5  
 白や紫、青の パヴィリオンの中へと落ち  
 屋根となって夕べの露から ホタルを守る。

そしてこの下生えの 楽園からは  
 花々が（まるで 目覚めた時の子供の眼が  
 その優しい歌声が まずなだめて最後には 6 0  
 目覚めさせなければならない 母親に微笑むように）  
 天の快活な風が 彼らを開くと 彼らは  
 まるで鉱坑のランプが 隠れた宝石を光らせるように  
 天に微笑みかけながら輝いた。そして一つ一つが  
 優しい太陽の光の中で 喜びを分かちあった。 6 5

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

というのは各々は 隣の花が放つ光彩と芳香で  
互いに浸透しあい  
まるで青春と愛が 愛しくする若い恋人達のように  
互いの空気に包まれ 満たされているからだ。

しかしそれが葉から根に至るまで感じていた 愛の小さな果実を 7 0  
作る事のできる この感覚をもつ植物は  
全てのもの以上のものを受け取った。それはかつてない程愛した。  
何人もそれ以外は欲しがらず、それは与えるもののみ属するものだった—

なぜなら、この感覚をもつ植物は、明るい花をつけないからだ。  
光輝や芳香は この植物の天賦の才ではない。 7 5  
それは愛のように愛する。その深い心は 愛で一杯で  
それが持ち合わせていないもの 即ち美しいものを欲するのだ!

気紛れな翼から 沢山のささやきのような音楽を  
流した 軽やかな風や  
その色彩をはるか彼方から運んでくる 8 0  
沢山の花の星から放つ 光を [欲するのだ]。

羽根のある昆虫は 素早く自由に  
まるで晴れ渡った海に浮ぶ 金色のボートのように  
光と芳香を一杯に積み 生きている草の  
きらめきの上を よぎって行く。 8 5  
太陽が高く昇るまで 花の中で火のように  
横たわる露の 月に見えない雲は  
やがて空に浮ぶ 霊のようにさ迷い  
一つ一つの雲は 持っている芳香に 気が遠くなる。

かすんだ真昼の 震える蒸気は 9 0  
 まるで海のように 暖まった地面にゆっくり降りてくる。  
 その中ではどんな音も 香りも光も  
 小川に生えてるアシのように そっとそよぐ。

一つ一つは全て 聖職にある天使のよう。  
 なぜなら感覚をもつ植物に 甘美な喜びをもたらすから。  
 一方昼の時間は のろのろ遅れて過ぎていった。 9 5  
 まるで柔らかな色の空に浮ぶ 風のない雲のように。

そして夕暮れが 高い空から降りてくると  
 大地は全て休息し 空気は全て 愛と  
 喜びとなり 昼ほど明るくはないが はるかにもっと深く 1 0 0  
 そして昼のヴェールは 眠りの世界からずり落ちた。

そして獣も鳥も 昆虫も 音の無い  
 夢という大洋の中に 溺れていった。  
 その波は海に敷き詰められた軽い砂に 刻印はするが  
 心象というものを 決して刻むことはない。 1 0 5

(一人 頭上では 甘い声のナイチンゲールが  
 昼にはできなかった もっと美しい歌をずっと歌っていた。  
 そしてその至福に満ちた ちょっとした歌声は  
 この感覚をもつ植物の 夢と混じりあった。)  
 感覚をもつ植物は 真っ先に縮んで 1 1 0  
 休息の胸の中に 入ってしまった。  
 この世で一番弱々しいが 夜の抱擁の中で  
 揺すってあやされて 楽しい事に飽きてしまった

母のお気に入り の 可愛い子供のように。

第 2 部

この美しい場所には 一つの力が存在した。 1 1 5

このエデンにはエヴァがいた。これは彼らが花に目覚めさせたり  
夢見させたりする 支配的な優美さで  
天体の組織に対する 神のようなものだった。

それはその種の中では 驚異的な女性であった。  
そのすがた形は 美しい心に支えられていた。 1 2 0  
その心は広がり 大洋の底で開く海草の花のように  
彼女の物腰と 動作を 敷衍<sup>ふえん</sup>してかたどり

朝から晩まで 庭の世話をした。  
そしてあの月下の天の 彗星<sup>すいせい</sup>たちは  
まるで夜がやって来る時の 空気のランプのように 1 2 5  
彼女の足跡の周りで 空の月を地球からあざ笑った!

彼女には死すべき種 [人間] の友達はなかったが  
彼女の震える息とばら色の顔は 語っていた  
朝が彼女の眼にキスして眠りから眼をさますと  
彼女の夢も楽園ほど まどろまなくなる。 1 3 0

まるで何か透明な霊が 星が目覚めている間に  
自分のために 大地から脱走したかのように  
またまるで太陽光線のヴェールが 彼女から彼を隠しても  
霊が彼女の周りに まだうろついているかのごとく。  
彼女の足取りは 彼女が通った草を哀れむようだった。 1 3 5

CULTURE AND LANGUAGE, No. 71

聞こえるでしょう。 彼女の胸の高まりのそばで  
風が起きたり 止んだりして  
そこに喜びをもたらし その背後に情熱を残すのを。

そして彼女の空気のように軽やかな足取りが 歩く所はどこでも  
彼女の後になびく髪は 草の茂る土地から 1 4 0  
その明るい顔を 消し去った。  
まるで暗い木陰の上を 明るい嵐が通るように。

あの甘美な庭の草花が 彼女の優しい足音に  
喜んだ事を 私は疑わない。

草花が彼女の 燃えるような指から 1 4 5  
生れたあの霊を その全身で感じた事を 私は疑わない。

彼女は明るい光に 気が遠くなった草花の上に  
小川から透明な水を まき散らした。  
そして重たい花の盃たるガクから  
雷雨の水を 飲み干した。 1 5 0

彼女は優しい手で 彼らの頭を持ち上げると  
杖とヤナギの帯で 彼らを支えた。  
もし花が 彼女の赤子だったら  
これ以上できない位に優しく 彼らの世話をした。  
そして殺し合う昆虫や 噛み付く虫や 1 5 5  
忌わしく醜い形の生き物全てを  
彼女は インドの織物のかごに入れ  
はるか彼方の 荒れ放題の森へと運んだ。  
そのかごは 追放された哀れな昆虫のために



P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

彼女の優しい手が摘める 160  
一番新鮮な草や 野の花で一杯だ。  
彼らは悪い事はしたけれど その意図は無垢なものだったから。

しかしハチや その通り道が雷となる  
光のような天体暦 そして花の唇に  
キスしても 傷つけない優しいガを 165  
彼女はお付きの 天使としていた。

そしてチョウが 次の人生の事を夢見ている  
沢山の 出生前の墓を  
彼女は 香りのよいヒマラヤスギの樹皮の  
すべすべした暗いへりのあたりに しがみつかせておいた。 170

この一番美しい生き物は 春先から  
甘美な夏の 季節の間ずっと  
庭に仕える仕事をしながら 動き回り  
そして最初の一葉が茶色に見える前に— 彼女は死んでしまった！

第3部

三日の間 この庭の草花は生きていた。 175  
ちょうど月が目覚めた時の 星のように。  
あるいはヴェスーヴィオ火山の噴煙から やがてぼっかりと  
明るく浮び上がる パーイアの海の波のように。

そして四日目になると この感覚をもつ植物は  
葬式の歌と 棺側の付添い人の 180  
重々しくゆっくりした 足取りと

会葬者の深くかすかな すすり泣きの声を感じとった。

やるせない声と 深い溜息  
通り過ぎる 死の静かな動きと  
棺の板の 気孔から漂う  
冷たく重苦しい 湿っぽい匂いを。

185

草むらの中の 暗い草や花は  
この群れが通り過ぎると 涙でキラキラ輝いた。  
風は彼らの溜息から 悲しい調子を聞きつけて  
マツ林の中にたたずみ 次々とうめき声をあげた。

190

庭は美しかったのに 冷たい悪臭を放った。  
まるでその魂であった 彼女の死体のように  
それは初めはまるで 眠っているように美しかったが  
ゆっくりと変化し やがて泣かない人をも  
震えさせる 一山となってしまった。

195

夏は素早く 秋へと流れ  
朝霧の中に 霜が浮んできた。  
昼の陽射しは 秘密の夜の略奪行為を  
あざけ笑い 澄んで明るく見えた。が

バラの花びらは 真紅の雪片のように  
足元の芝生と コケの上を敷き詰め  
ユリの花は 死にゆく人の頭や肌のように  
真っ白にやつれて うな垂れていた。

200

そしていつも露に育てられていた この上なく甘美な

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

香りと色をした インドの植物は 205  
毎日 葉を落とし  
普通の粘土に 固まっていった。

そして茶色や黄 灰色や赤の枯れ葉は  
死んだものの白さに 白くなり  
まるで乾燥した風に乗った 幽霊の軍団のように通り過ぎ 210  
そのピューピューという音は 小鳥たちを怯えさせた。

そして突風は 羽つけた種子を  
醜い雑草の生地から 目覚めさせた。  
やがて芽は沢山の甘美な花の 茎の周りにまつわり伸びて  
朽ちて 彼らと一緒に 大地に混じった。 215

小川の底に生えている 水の華 [アオサ] の花は  
ついていた茎から 折れて  
風が上空の渦を 追い回すように  
渦が彼らを あちこちに追い回していた。

やがて雨が降ってくると 折れた茎は 220  
折れ曲がりもつれて 散歩道をさえぎった。  
そして葉が落ちた 網目模様のヤドリギの東屋は  
全ての可愛い花も一緒に、ごっそりと固まって朽ち果て  
嵐と雪の 季節の間にも

ありとあらゆる忌むしい雑草は 生長を始め 225  
その粗野な葉には まるで水へびの胴体や  
ヒキガエルの背中のように 沢山の斑点がちりばめられていた。

そしてアザミやイラクサ 悪臭を放つドクムギ [ネズミムギ]

ギシギシ [タデ科]、ヒヨス、じめじめしたドクニンジンが  
 その長く空ろな軸を 伸ばし 230  
 淀んだ風が悪臭を放つまで 空気を窒息させた。

やがて詩がその名を聞いたら 忌わしく思う植物は  
 トゲだらけでドロドロして 泡だらけで青く  
 不気味で青ざめた 露が点々としている  
 恐ろしい下生えで その場所を一杯にした。 235

そしてハラタケやキノコは まるで冷たく湿った  
 地面から上る霧のように ウドンコ病と  
 カビと共に生長した。 まるで朽ちていく死体が  
 成長の霊に 生命を吹き込まれたかのごとく  
 青ざめて多肉質に！

彼らの生れているコケは 少しずつ腐っていき 240  
 やがてその分厚い茎は 殺人者の棒のように刺さり  
 離れた肉片が まだ高い所で震え  
 周りをうろついている風に 菌を撒き散らしていた。

菌糸や雑草、汚物、ライ病のような上皮が  
 ドロドロして沈んで 音のない細い流れをなし 245  
 その出口では 棒のようにでかいガマが  
 水ヘビのように根を結び目にして その流れをせき止めていた。

そして何時間も 空気がしんとしている時には  
 生き物を殺す力のある 蒸気が立ち上った。  
 朝にはそれらは目に見え 正午には感じる事ができ 250  
 夜にはそれらは 星も溶ける事のできない暗闇となった。

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

そして滑らかな可塑性の流星が 明るい昼間には  
見えなくとも 噴霧から噴霧へとそっとよぎっていった。  
それらが降り立った枝は全て 有毒な焼き枯れ病により  
燃え 腐食していた。

255

感覚をもつ植物は 呪われたもののように  
泣いた。すると そのたたんだ葉の  
まぶたの中で 涙は一緒になり  
凍ったニカワの焼き枯れ病へと 変化した。

なぜなら葉も枝も すぐに落ち

260

突風のすごい斧に 切り落とされてしまったから。  
樹液はまるで もう鼓動をうたない心臓に血が戻っていくように  
穴という穴を通して 根元まで縮んでいった。

というのは冬がやって来たからだ。風は彼のムチと化し

一本のヒビの入った指が 彼の唇の上にあった。

265

彼は山々を引き裂き 大滝を作った。

するとそれらは手かせのように 彼の帯を音をたてて閉めた。

彼の息は大地と空気と水を 音もなく縛る鎖だった。

彼は北極圏から 十層にも重なった突風に激しく追い立てられて

彼の戦車の玉座に座ってやって来た。

270

やがて生きるしかばねであった 雑草は

霜から逃れて 地下へと潜っていった。

彼らの腐蝕と 霜からの突然の逃亡は

まるで幽霊の消滅 そのものだった！

275

そして感覚をもつ植物の 根元では  
モグラやヤマネが 餓死した。  
鳥は凍った空気から 硬直して落ち  
枯れた枝に 引っかかった。

まず暖めて柔らかくする 雨と  
ポトポト落ちる雫が 枝に再び降って凍り 280  
次に 凍るような露が 蒸発して  
暖めて柔らかくする 雨となった。

すると北風の渦が 死んだ子供の匂いを嗅ぎつけた  
オオカミのように あたりをうろつき回り 285  
雪や霜でずっしり重く固まっていた 大枝を揺るがし  
彼の固い蹴爪でそれらをはじき落とした。

冬が去って 春が帰ってくると  
感覚をもつ植物は 葉のないむくろとなっていた。  
しかしマンダラケもトードストール [毒タケ] も ギシギシもドクムギも 290  
その廃墟の納骨堂から 死者のように蘇った。

### 結論

感覚をもつ植物だろうと その枝の中に  
雲のように座っている ものであろうと  
その外形が 衰退を知る前に  
今この変化を感じていたのか 私には言えない。

あの婦人の優しい心が

5

P. B. シェリー 詩選 (1) (加藤芳子)

形 [肉体] と合体していなくなったのか 私には言えない。  
空の星が照らすように かつて愛を浪費し  
喜びを忘れて 悲しみを見つけた あの形と。

私はあえて推測はしない。しかし  
過ちと無知と争いに満ちた この人生では 1 0  
何物も存在しないが 万物は存在するやに見える。  
そして私達は 夢の影なのだ!

というのはそれは 謙虚な信条だ だが  
人がそれを考えると 楽しいものだ。  
死自体を所有する事は 残り全部に似て 1 5  
徒勞に 違いない。

あの甘美な庭も あの美しい婦人も  
この世のあらゆる 美しい形と香りあるものも  
本当は 死んではいけないのだ。  
変わったのは彼らじゃなくて 僕らで 僕らの形 [肉体] なのだ。 2 0  
なぜなら愛や 美や快樂には  
死も変化もないからだ。彼らの力は  
それ自体は はっきりとは見えないが  
光に耐えられない 僕らの肉体を 超えているのだ。

〔「解放されたプロメテウス」を含む詩集の中に掲載さる  
最後に ピサにて 1820年3月とある〕